

introduction

本誌 2014 年 Vol.33 No.2 では「股関節鏡の功罪と未来」というテーマで特集を組ませていただきましたが、それ以来の「股関節鏡」のテーマになり 12 年が経過しました。当初は股関節鏡手術が急速にわが国でもスポットライトを浴び、いよいよ股関節の領域においても、膝関節鏡・肩関節鏡などのように敷居が低くなった有効な治療選択肢の技術の一つとして大きく期待されて間もなくの時期でした。ただ寛骨臼形成不全のような、その適応の不明確さもあり、潜在的な合併症などの表に出ていないイベントにも注目されていて、まさに功罪と未来というテーマがしっくりしていた時期でした。

その後、本領域は発展し、さまざまな関連学会ではシンポジウムとして取り上げられ、低侵襲での joint preservation surgery の位置付けも安定し、手術技術が改良向上され、短期の治療効果のエビデンスも急増しました。さらに、股関節鏡視下手術のさらなる技術向上を目指す股関節外科医に向けて、日本股関節学会の教育委員会では「FAI 関節唇カバーセミナー」が、教育研修セミナーアドバンスコース（股関節鏡コース）の受講修了者を対象に開催されています。加えて、手術技術については、日本股関節学会の技術認定委員会において「股関節鏡視下手術技術認定制度」により審査を行い、股関節鏡技術認定取得医として承認するなど、本領域を取り巻く環境やシステムにも目覚ましい発展がみられています。

また、2009 年から「股関節鏡フォーラム」として発足された「日本股関節鏡研究会」が 2015 年より会員制の専門的な研究会として開催されていますが、ここ数年では次世代の股関節外科医の参加者も増えている状況にあります。

股関節鏡視下手術は、関節外科の手術術式のなかでも技術レベルは高くなりますが、関節唇損傷、関節内遊離体、変形性股関節症、さらには FAI などへの適応が広がり、これまで原因不明と診断されざるを得なかった股関節痛への治療だけでなく、将来の人工股関節置換術を回避できる可能性も高く、次世代に継承していく価値のある技術として注目されています。

このような情勢から、股関節鏡視下手術に関する知識や技術を次世代の外科医に残しておくには、今が milestone のタイミングと思い、本特集を企画しました。今回の特集では、股関節鏡視下手術における最近の潮流である適応の変化や技術革新の進化に焦点を当て、その手術技術の詳細、考え方、現在の状況や問題点、今後の展望などを 1 冊にまとめることを意図して構成しました。特集論文は股関節鏡視下手術の最前線の施設、さらにはレジェンドの先生方に、非常にご多忙のなかでご執筆いただきました。この場をお借りして深く感謝を申し上げます。股関節鏡視下手術には、正確かつ高い技術が必須です。本号が次世代の股関節にかかわる外科医の guidepost になることを強く願っています。

北里大学大学院医療系研究科
高平尚伸